

「だれのための仕事なのか」

朝日新聞那覇支局長

松田 和生

夏休みに四国へ出かけた。気ままにレンタカーを走らせ、あと思つたところで宿を取る旅。主要都市への距離や交通規制の情報を伝えてくれる電光掲示板は、ドラ



電光掲示板の正しい使い方。これなら渋滞にイライラするだけで済む(宜野湾市の国道58号で)

「八月は道路ふれあい月間です」
ええい、ほかに伝えるべき情報はないのか。頼む、だれかあれを止めてくれ。快適な気分は消え、イライラだけが募つた。
思い直しました。ひょっとしたら大変な「月間」なのかも知れない。沖縄に居るなり、国土交通省のホームページを開いた。いわゆる「国民に改めて道路とふれあい、道路の役割及び重要性を再認識してもらい、さらには道路をいくつくむという道路愛護思想の普及及び道路の正しい利用の啓発を図り、道路を常に広く美しく、

安全に利用する機運を高めることを目的として……」。
何これ？ 日本語のひどさはおくとしてこの文を起草した人、そして決裁したはずのエンジニアは「道路とふれあい」「道路をいくつくむ」「正しい利用」って何なのか、本当に説明できるのか。ドリルやツルハシで道路に穴を開けて回ったり、爆破を試みたりする輩が横行しているのなら分らないでもない。「ゴミを捨てないで」程度の話なら、小学校じゃあるまいし、わざわざ国のお役人に「教示」いただくまでもない。「道路愛護思想」には思い切り笑わせてもらつた。
前身の「道路をまもる月間」は一九五八年に始まった。このキャンペーンのために累計でどれだけの税金が投じられたか知らないが、いまだに国民は「啓発」の対象であるらしい。朝日新聞が八十八年以降の十四年間で「月間」に触れた記事は二十八本しかない。その間、国側が恐らく全都道府県で記者発表を繰り返してきたにもかかわらずだ。「ふれあい」に名前が変わつた今年はたまた本。マスメディアに乗るのがすべてではないだろうが、この数字は深刻に受け止めてもらいたいと思う。
行政が「ふれあい」を言い出すと、反射的に「ウンツケ」と思つてしま

う。「いきいき」「やさしい」「もうさん臭い。小泉サンだつて、痛みを伴う改革」と言っている。時世なのに、耳障りのいい言葉さえ使えばよく分らない事業を続けられるとは納税者もなめられたものだ。

たまたま道路の話になつてしまつたが、農政や漁政にしても、例えば沖縄県内のあるところで見かける「国庫補助 事業」の看板には疑問を持たざるを得ない。いったい、あれはだれにアピールしているのだろうか。とても一般市民向けには見えないし、受益者である農林水産業者には言わずもがなの内容だ。安くはない金がかかつているはずなのに、後は朽ち果ててうがほつたらかなしなのだから、暴走族の落書きと変わらないではないか。

改めて言うまでもないけれど、主役は住民。事業の改廃が大変なのは分かるが、すぐにでもできることは結構ある。沖縄総合事務局に關してつだけ挙げるなら、せつかく立ち上げたホームページ。住民との接点としては非常に有用なのに、九月になつてもイベント案内が七月で止まつているのはいかなものだろうか。